

井戸端だより

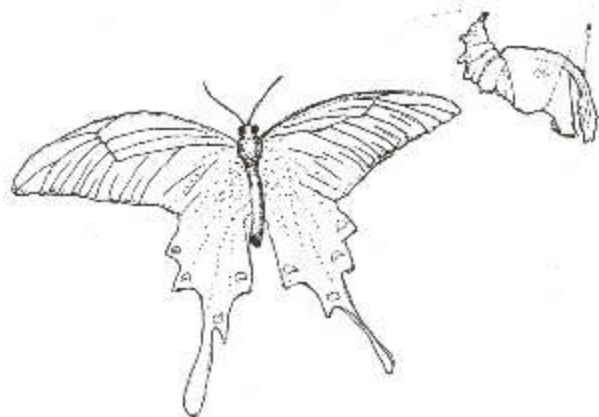
第97号

発行日：2017年3月23日

発行：くらしの学習会

目次

- 1月例会報告 総会と新年会・・・・・・・・・・1
- 2月例会報告 「井戸端だより第100号」・4月例会について・・・・・・・・・・2
- 東温市議会を傍聴して～男女共同参画社会づくりを思う～・・・・・・・・・・4
- 九十歳 何がめでたい・・・・・・・・・・6
- 春一番 竜女となりて 友は逝く・・・・・・・・・・8
- 七草がゆのこと・・・・・・・・・・10
- ある仲間を失って・・・・・・・・・・12
- 台湾で聞いたこと・・・・・・・・・・15
- 雑感・・・・・・・・・・19
- 新聞切り抜き・・・・・・・・・・23
- 編集後記・・・・・・・・・・25



1月例会報告 総会と新年会

1月10日10時から総会と新年会を行いました。参加者6名で、名簿確認と活動報告、会計報告、続いて今年度の活動計画など話し合いました。

【会計報告（2016年1月～2016年12月）】

収入		支出	
前年度繰越金	105808	用紙代通常	4544
活動会費7名分	14000	切手代	12671
購読会費9名分	9000	送料	872
カンパ2名	3820	封筒	213
利子	9	遠出ガソリン代	4300
螺旋葉書売り上げ金	8413	高速料金	11770
合計	141050	合計	34370

差引 $141050 - 34370 = 106680$ 次年度繰越金

【2月の予定】

例会2月14日

- ・100号に関して話し合い

【3月の予定】

井戸端だより97号発行

- ・原稿締め切り3月17日・印刷3月23日10時・川内公民館

例会は印刷終了後

【4月の予定】

例会4月15日～16日

- ・愛南町方面に行く・見学場所は未定

【井戸端だより100号について】

100号に向けて今から印刷スタイルをある程度統一しようということになった

- ・目次の頁には数字は入れずに、原稿紙面から入れ始める
- ・タイトルは紙面中央に入れる。ただし例会報告のみタイトルは左端で内容も記入する
- ・イニシャルは文末に入れる。ドット（A、B）は見づらいので（A・B）でいい
- ・文体や文字の大きさは自由
- ・できるだけ読者の声を入れる

これらの話し合いの後、会員の一人が学習会の皆の厄除けを兼ねて小鼓の「高砂」を打っていただきました。皆、なかなか聞く機会のない小鼓に聞き入っていました。

（K・K）

2月例会報告 「井戸端だより第100号」・4月例会について

2月14日（火）10時よりHさん宅に於いて5名参加での例会となった。この日は「バレンタインデー」という事でHさんが手作り生チョコブラウニーを用意してくださったので、まずはティータイム。少し漏かさが残る優しい甘さのケーキに皆大満足。早速作り方を教わった。（レシピは後ほど掲載）

まずは「井戸端だより第100号」の内容について。「井戸端だより第50号記念号」と「井戸端だより第80号記念号」を見ながら話し合った。活動報告については項目別の80号方式（パネル展・出会い塾・東温市、行政機関との関わり・文化、歴史、美術館を訪ねて・自然探訪・くらしの学習会続支部）に決め、くらしの学習会発足の原点「私たちが使っている水の学習」と『おさんぽ会』の2つの活動報告の項目を追加することになった。81号からのもくじ一覧はTさん、出会い塾の国名・氏名・職業のまとめはKさん、水の学習については私が担当することになった。写真はそれぞれのパソコンから取り出し皆で選択することになった。

次は、4月例会予定の松野町・愛南町訪問について。1月例会で4月15日（土）～16日（日）の一泊例会を決定。参加人数によってはレンタカーを利用し、運転はHさんのご主人にお願い出来ればとほぼ決めている。

ここからは、Hさんのご主人が参加。具体的な事は何も決まっていなかった状態だったので、パソコンで東温市にあるレンタカー会社に電話をし8人乗りのワンボックスカーの情報を、宿泊場所は仕事関係で愛南町へ出かけられることの多いご主人が利用されているホテルに電話をし情報を手早く入手して下さった。訪問先についてもパソコンから様々な情報を取り出してくれ愛南町「石垣の里 外泊」松野町「虹の森公園まつの」の2か所を基準に訪れる場所を決めていくことになった。

3月は印刷月で例会の予定がないので印刷日3/23に情報を寄せ集めて訪問場所を決めることになりそうだ。 (A・M)

~~~~~

<生チョコブラウニー レシピ> ※クラシルレシピより

(材料)

(作り方)

チョコレート 240g  
バター 20g  
生クリーム 200cc

①湯煎にかけてチョコレートを割り入れ、  
ゴムベラで混ぜながら溶かし、バター・  
生クリームを入れさらにゴムベラで混ぜ  
合わせる。

小麦粉 60g  
ベーキングパウダー大さじ1  
砂糖 20g  
全卵 1個

②湯煎を外し小麦粉をふるいにかけてゴム  
ベラでざっくり混ぜ、ベーキングパウダ  
ー・砂糖・全卵を入れゴムベラでさらに  
混ぜる。

③②を側面と底面にオーブンシートを敷いた20cmの型に流し入れ、予熱をかけたオーブンで焼く。160℃ 30分  
チョコレートは市販品で良い。クルミを入れても良い。

~~~~~

東温市議会を傍聴して

～男女共同参画社会づくりを思う～

市議会を傍聴するのは随分久しぶりだった。3月8日、昨年10月の選挙で選ばれた市長・議員（定数16名）による平成29年第1回東温市議会定例会を傍聴した。ひな壇の理事者の顔ぶれはすっかり変わっていた。ひと際目立っていたのは長寿介護課の女性課長。重信町の時代環境課に初めて女性課長が誕生して以来かと思う。

7日間の議会の日程の内4日目の一般質問の2日目。3名が予定されていた。一番目の質問者M・A女性議員による質疑応答を傍聴した。質問内容は4項目。①男女共同参画社会づくりへの取り組みについて

- ②東温市の魅力ある窓口づくりとオフィス改革について
- ③東温市奨学基金運用等制度について
- ④イルミネーション実地状況について。

これらの質疑の詳細に関心ある方は東温市のホームページで見ていただくことにして・・・。

さて、私自身の関心は、やはり男女共同参画社会づくり。M・A議員は、平成28年3月に策定した第2次東温市男女共同参画計画（コンサルタントに委託した）と10年前に策定されたものとの変更事項・新規事業を問うていた。『「広報とうおん2016.9月号」に、特集～男らしく？女らしく？“自分らしく”一男女共同を考える―第2次東温市男女共同参画計画を策定しました』と、掲載されている。

それによると、『共に生き共に築く協働のまちづくりを基本目標とし、

- 4つの主要課題
- ①男女共同参画の視点に立った意識改革
 - ②男女が共に参画するまちづくり
 - ③男女が共に働きやすい環境の整備
 - ④男女が健やかに安心して暮らせるまちづくり

これからの10年間、本計画に沿って実現に取り組みます』とあった。

男女共同参画社会づくりの文言を見聞きするようになって久しい。専業主婦となり地域社会に関心を持つようになった25年前には、「お金（補助金）は出すが口は出さないから自由にやってください」と首長の言葉に刺激され、当時の重信町の各種女性団体は自主性を発揮していた。一線から退いた今、疎遠になってしまっ

たが、その当時の女性団体連絡協議会は今も活動は続いているのだろうか。男女共同参画社会づくりの担当課は福祉課から総務課に変わり、年に一度市民・職員を対象に講演会を開いている。個々でみると公の場での女性の発言力も行動力も向上してきたように思うが、日本の性別役割分担意識の長い歴史を思うと底上げは簡単ではないと思う。世の中男女半々で構成し、人々の暮らしを守るための決め事に女性はなかなか参画できていない。

女性塾～ニュース～きり東温と名称を変えながら男女共同参画社会を目指して 25 年間活動を続けている女性団体がある。発足当時は大勢いた活動会員も今では少なくなつたと聞く。でも毎月の例会参加者を「広報とうおん」で募り、活動報告書を毎年発行している。市の担当課とこの団体との連携はどうなっているのだろうか。そして、東温市男女共同参画計画はコンサルタントへの委託や、少人数のアンケートに重きを置くのではなく担当課が中心になり住民と顔を合わせ声の集約を形にしていってこそ底上げになるのではないかと思う。本気で“まちづくり”を目指すなら猶更だと思う。特に女性議員は積極的にかかわってほしいと思う。

議場の入口で「議場改修についてのご意見について」の紙を渡された。開かれた議会を目指し傍聴席を拡張するための議場改修を計画しているという。新庁舎になった時から常々傍聴席が狭すぎると言ってきた。17 年たってやっとという思い。20 人ほどいた傍聴席に若者の姿があった。今春から大学生になるという。この体験をしたことで、今後も世の中の動きに関心を持ち続けて欲しい。

齢を重ねるにつれ家族構成も、興味や関心も変わった。しばらく遠ざかっていた一番身近で関わりのある市議会の傍聴をしたのを期に、更に地域に関心を持つことの大切さを思ういい機会になった。

(S・K)

九十歳 何がめでたい

佐藤愛子氏の「九十歳 何がめでたい」が、ベストセラーになっている。

私も年を重ねることが嬉しいことばかりでないので、ちょっと同感する気持ちもあり、買ってきてもらって一気に読んでしまった。なるほどという話もあったが、拍手して笑顔で終わることは出来なかった。

それは、生まれた場所、育った環境、受けた教育など自分をとりまくすべてのものが、からみ合って幸せ感はあるものだと思う。

どんな環境に生まれた子も「這えば立て、立てば歩めの親心」という言葉があるが、赤ちゃんの成長は早く、親も祖父母も兄弟も共に喜んだのが思い出される。

今の自分はどうか。「座れば立てない」、物にすがってやっと立てば、杖をついて自分を励ましながら、一、二、三、四、百歩、歩いてひと休み、誰も見ていない川の土手で二百メートル歩けば「よく頑張ったね」と自分を褒め、帰り道となる。でも、この歩けた達成感には自分にしか分からない幸せ感である。

昨日より十メートルでも多く歩けるように目標を立て、今は一キロメートル歩く事が出来るよう頑張っている。

私の生まれは、昭和九年なので第二次世界大戦の中。物心ついた頃には、空襲は激しく、配給の食物は八人家族でお米一合。野原でひよこ草を摘み、すいじを採り、いなごを袋に入れて帰り、汁だけの雑炊といなごの串焼きが日頃の食事だった。子供達は「ひもじい」という言葉しか言えなかった。親は「こらえてな、ごめんな」と言いながらも、やせ細った赤ん坊を背負い、農家に出向いて、畑に捨てられたピンポン玉位の玉ねぎやじゃがいもをもらって帰った時は、皆で喜んで雑炊の中身の多さに大喜びした事を覚えている。

こんな少女時代を過ごした事がトラウマになって、今の食生活を裕福な時代、豊かな食事と思わずにいられない。朝は食パンに牛乳、卵、昨夜の煮物の残りに野菜の酢の物、果物と体に良いと言われる物を食べれる事が幸せである。八十歳を過ぎた老人が、こんな食生活を送らせてもらっている一方、貧困家庭では朝食も食わずに学校へ行ったり、夜も子供達だけで弁当を買って済ませたりと、日本でも貧富の差が大きいことは、テレビや新聞でよくニュースになっている。又海外では、アフリカ等の貧しい国では、一日の食事が一回とか、一分に一人の赤ちゃんが亡くなるとか栄養不足に喘ぐ人々が何万もいるとか、世界は一つと言いながらこれでいいのだろうか、と思う

毎日である。だから私の生活では「残菜を出さない」、食べ物は上手に使って「捨てる物を出さない」様に工夫して食品を大切に使っている事が、自分への戒めかもしれない。

次に戦後の思い出は、松山で空襲にあいすべてを失い、祖母の家に住む様になった八人家族は着る物も少なく、下着など一週間着ているのは日常だった。布団も緋のせんべい布団で、一つの布団に三人が寝ていたと思う。のみや、しらみがわき、夜中に休中が痒くなり、バリバリ掻き、皮膚病になった事を覚えている。

洗濯機もない時代、盥に洗濯板、洗剤もないので灰の汁で日曜日に私が洗濯係で皆の下着を洗っていた。縫い目を開くと、のみやしらみがひっついてるのを母に言うとお釜に熱湯を沸かし、「しばらく浸しておくとお虫の卵迄死ぬから」と言われ、その様にして洗っていたが、又次の一週間で同じ様な状態だった時代が、戦後の日本の貧しさを物語っている。

今の私は、毎朝下着とパジャマは液体の洗剤で洗濯機におまかせで、太陽の力で乾かし洗剤の香りの少し残った下着を着けて、幸せを感じている。

幸せ度はその人その人で違うが、その感じ方は他人と比べるのではなく自分の人生が感じさせてくれるものと思っている。ノートルダム清心学園理事長の渡辺和子氏は、老いは「宝」と説いている。「宝」になる人生でありたいものである。

(S a · K)

春一番 竜女となりて 友は逝く

・人口問題が最優先

一月は行く、二月は逃げる、三月は去ると言いますが「光陰矢の如し」あっという間に三月になりました。皆さんご存じのように今、日本は少子高齢化が進み人口は減る一方です。若い世代が将来への不安から結婚をためらうような社会では「生涯未婚者」が増える一方でしょう。そのため好むと好まざるとにかかわらず、移民を労働力としてどんどん受け入れていくことになるのです。

世界で日本が一番先に超高齢化社会に突入することは、何十年も前からわかっていたことです。「泥棒を捉まえて縄をなう」というように遅きに失しましたが、それでも今、出生率向上のために国をあげて取り組まねば、この国の未来はありません。

女性防衛大臣ではありませんが、やはり適材適所というものがあります。産む性を持つ女性は生命に対して根源的に男性とは違います。女性として男性に勝る能力を発揮できるのであればぜひ女性の力量を認めていただき活用して互いに協力して出生率の向上に努めていただきたいと思います。まさに日本における最大の問題は経済対策よりも人口問題だと思います。

・認知症への心がまえ

私の友人が、東京に住む一人娘の近くにマンションを買って移り住みました。彼女の仕事は孫の送迎だったようですが、転んで入院、車椅子の人となりました。退院後は施設に入り、時々電話をしてきましたがそのうち「ここが恐いの」と言って泣くばかり、「お姉ちゃん、ハサミがいくら探しても無いの、持ってきて」などと言い出しました。大阪医科大に勤めたしっかり者の彼女が、今は話すこともできなくなった。考えもしなかったことです。明日は我が身、心して過ごさねばと思いました。

又、私の周囲にも認知症の人が増えました。自分でもおかしくなっていくのが分かるらしく、不安とさびしきでウロウロしています。でも足腰が丈夫なので毎日寒かろうが風が吹こうが、ボランティアで道路の落ち葉集めに出ています。私が「今日は寒いから止めたら？」と言うと「何もしないでいるより、人と話すと気が晴れるから行ってきます」と言われる。「今日も落ち葉集めをしていると、自転車の人が降りて声かけしてくださった。この辺は暗いから外灯が欲しいとか、木を切らな

いと防犯に悪いとか、東温市に雇われていると勘違いされてるのかしら。又ある人は落ち葉は良い肥料になりますねと言われるので袋に入れてありますので、どうぞと言うと笑って去って行かれる」と楽しそうに話してくれます。それなのに一緒に入浴すると、口笛を吹くので「どうしたの」と聞くと「天井に猫がいて、こちらを見てるの」と指を指す。彼女の頭はどうなってるのだろう。でも童女のように可愛らしい。認知症もいろんな形で現れるので単純に比較できないが、自分の意思で無理をせず動けるだけ動く彼女は、たぶん最後までトイレに行けるだろう。

行政がしてくれる、ではなく「自分の体は自分で守る」ため、脳トレ、散歩、体操など自分のできることをし、1日1回は「今日、行く所がある」を心掛け前向きに生きて健康寿命を全うしたいものです。

・いつまで生きるべきか

今、日本では100才以上が6万人を超え、80才以上の人口が1000万人を超えたそうです。次のオリンピックが終わった後には660万人の団塊の世代が後期高齢者になり、周りのどこを見ても老人だらけになるそうです。赤ちゃんが少なく生まれ、多くの人が死ぬ時代がすぐそこに来ています。アメリカでは終末施設に入ると大体三ヶ月から長くとも半年で亡くなるそうです。ところが日本では同様の施設に入ると亡くなるのは三年から長い人は十年後だそうです。そうになると、ある政治家の発言「高齢者はいつまで生きるつもりか」とか「高齢者、死んでください。世のため人のため」などの川柳が生まれるのです。姉(96才)の死を見つめて人はいつまで生きるべきかを考えさせられる此の頃です。

春一番 竜女となりて 友は逝く

H29年3月記 S・M

七草がゆのこと

卯月も近い日。正月7日の話で申訳ありません。古い古い昔のこと。中国に大層親孝行の息子がいて、老いてゆく父母に、若き命をと、自分の生命と取り換えてもよいと願っていた。8千年生きるという鳥が、新年の初め若菜をたたき食しており、この若者にそれを教える。願い叶い、父母は若返り息子はその孝行ゆえについに皇帝となった。かくして中国では、新年に若菜・若草の類を、たたき食する習慣が広まり、受け継がれていて、本朝の帝にも伝えられることとなった。

第58代光孝天皇の女御を祭神とする福王子神社が、宇多野の地にあり、7日早朝ここを訪ねた。特異なことは、神殿への供えものに、大きな丸々の蕪をどんとお捧げしていた。すず菜である。その形が鈴に似、天鈴として尊ばれたものである、さて、光孝天皇の父帝は、料理の博士でもあり、自ら人々に食を振る舞われていた。先帝の例に倣い、光孝天皇は広い宇多野の地に、若菜を摘まれた。「君がため春の野に出て若菜つむわが衣手に雪はふりつつ」百人一首第15番である。幼少より聡明で学問を好み、性格は温和であったと伝えられる。「親王におましましける時に、人に若菜をたまひける御歌」とある。

左様な事蹟からであろう、福王子神社が新年7日、昼の間に人々を順次招き入れ、青菜の緑も美しい粥を、品よき器でお作法よろしくすすめるのである。よく各地に見る婦人達の炊き出しで、公民館などの一椀のみのそれとは趣を異にする。今では宇多野は人家等々も建ち並び、野草とて採取する所もなく、嵯峨野の地より摘んで来るそうである。この地の料理家（女性）の提唱尽力による処大であり、現代になって、当神社で催されることになった由である。この日は、もの静かな宮司さんは、手渡した番号札で、席の様子を見計い、大声で境内の人々を招き入れるに大奮闘である。そんな中、私に資料を下さったり、お話下さったり、有難いことでした。とても全てを書き尽くせません。

天皇家ではこの習慣が引き継がれ、やがて江戸・徳川の時代に、将軍家にも、次第に全国各代名、そして庶民へも広まり、今日では正月の飽食のクスリともなっている。いづれにしても粥に菜食は誰しも健康に良いとしている。京の寺々では、お務め後、朝粥を頂く会が諸方にある。精進である。

「唐土の鳥が日本の土地に渡らぬ先になずな七種」声をかけつつ、6日の晩に青菜をたたき風習が残る地もある。

組板の染じまで齊を打ちはやす

長谷川かな女

(M・D)

ある仲間を失って

2月11日、大変尊敬する仲間を失い、毎日夜になると悲しくて涙が出る日が続いている。出会いは、私が名古屋から引っ越してきて、あまり日にちも経っていないころ、同じ宿舎のお向かいの人に誘われて行った松山市の英語ボランティアガイドクラスだったと思う。1989年（平成元年）10月のことである。英語の堪能な人だった。

2、3年経ったころ、うちの夫のところにカナダからのお客さんがあって、その人の専門が彼女のご主人と近かったため、夫のご主人にお願いして一緒にどこかの山に行っていたことがあった。その帰り、夫が適当にどこかで昼食を済ませて夕方帰って来ると言っていたので、部屋の掃除に忙しく、買い物には午後行くつもりで、冷蔵庫は空っぽ、昼は一人で簡単に済ませれば良いと思っていた。そこへ、丁度昼頃夫がそのカナダ人とともに、何と彼女とご主人も一緒にわが家へ初めて来られたのである。聞けば、まだお昼ご飯を済ませていないとのこと。全くの想定外で、何の準備もしていない状態だったので、頭が真っ白になった。時間的にお昼ご飯の時間だったので、何か出さなければならぬ、しかしいつもはストックがいっぱいあるうちなのに、その日に限って冷蔵庫の整理をして、本当に何も無い状態だった。材料がなければ作りたくても何も作れない。苦肉の策で、冷麦をゆでてキャベツ炒め（ほかに野菜がなかった）を作り、食卓に並べたが、何と寂しい食事だったことか。お二人の初めての来訪がとんでもないものになってしまったことを、今は懐かしく思い出す。

その時、いかにも昔気質の亭主閑白なご家庭という感じがしたのだが、奥様の英語力を頼りに、いつも通訳をしてもらっているというご主人が、心の底では奥様を大変尊敬していらっしゃるということが分かった。

その後、私が日本語教師の世界に入り、彼女とはそのグループでも仲間となった。実家の母と1歳違いということで、年齢的には大先輩なのだが、彼女の誰に対しても公平で対等な態度に甘え、敬語を使うこともなく、仲間としてずっと接してきた。同じ勉強会に属し、県やその他の仕事でもチームティーチングの相棒としても、20年以上一緒にやってきた。そして、いつも母と比べながら彼女を見てきた自分がいた。

もともと、彼女は英語の世界から来たので、英文タイプはお手の物であったからか、パソコンをかなり高齢で始めたのに、メールも文書作りも完璧だった。また、語学に素養があるので、英語はもちろんのこと、子どもの時台湾にいたということもあってか、中国語にも興味があり、勉強をずっと続けていた。フランス語も並行して勉強していた

ので、私が夫の留学で1年弱フランスに住んでいたことを知ると、フランス語の話をしたり、フランス語検定のことなど尋ねたりしてきた。私自身は帰国後、名古屋にいるときはフランス語を続けていたが、愛媛に来てからはほとんど離れてしまって、今や単語もなかなか出てこなくなってしまうのに、ずっと続けている彼女を本当に素晴らしいと思っていた。

日本語の勉強会でも本当に熱心で、いつもよく調べてきていて、その発言に感心させられたり、刺激を受けたりすることばかりであった。また、勉強会の係は、パソコンで県の国際交流センターの研修室を2か月前に予約しなければならないが、ずっと率先して係を引き受けてくれて、同じメンバーとして本当にありがたかった。

20年ほど前に癌にかかって、その後も何度も入院、手術を受けていたのだが、その度復帰を果たし、私たちのところへ戻ってきてくれた。一時、体調がすぐれず、一旦クラスメイトからは遠ざかっていたこともあったが、2年の空白からグループの復帰プログラムの過程を踏んで、再び戻ってきてくれた。昨年7月も私がコーディネーターを務めた県の海外技術研修員の日本語研修で、1コマだけだったが講師をお願いしたが、周到な準備に裏付けされたいい授業を提供してくれた。今、私の手元にその時の彼女と学習者の写真がある。

その後、9月に癌センターに入院し、放射線治療を開始。開始してすぐのころ、お見舞いに行ったが、その時はとても元気そうで、歩かなければならないから、下のロビーで会おうということで、お見舞いにならなかった。数年前に夫がやはり放射線治療を受けていたので、その時の話を聞かれたりしたが、勉強会も退院したらすぐに出るからねと前向きだったので、勉強会での再会を楽しみにしていた。ただ、その後9月末には勉強会の係をほかに人に代わってほしいという連絡が入った。

結局退院後、食欲がなかなか回復せず、一時は相当やせたということだったが、12月にお見舞いに行ったときは、かなり回復していた。1時間ほど話したが、そのうちに勉強会にも顔を出すからねということで別れた。

そして、1月1日、彼女からの年賀状は、一枚一枚相手のことを考えての、絵手紙だった。初孫が生まれた私宛の年賀状は、赤く描いた可愛い鯛（目出鯛）に「お孫ちゃんもふえ、II家はにぎやか」と言葉が添えられてた。

1月30日には私が送った勉強会の報告の内容についてメールでほめてくれて、まだ今は勉強会に出られないけど、報告はこれからも送ってねと書いてあった。

その後、同じ施設に住んでいる日本語仲間経由の情報で、彼女が亡くなったことを知った。あまりに急なことでショックだった。2月12日のことだった。直後に勉強会の

メールでお嬢さんから詳しい情報が入ってきた。

11日お昼頃亡くなったとのこと。1月31日に上のお嬢さんが来た日の夜から病状が急変したこと、3日に癌センターの緩和ケア病棟に救急車で運ばれたこと、下のお嬢さんが来られるのを待って、最後まで会話をして亡くなったと書いてあった。葬儀は行わず、すでに施設の共同墓地に埋葬したとのことだった。

お嬢さんのメールの中に、彼女の残した言葉として「もし、最後に間に合わなくても後悔しないですね。十分楽しく過ごしたから。もし、誰かに間に合わなくて残念だったと言われても気に病むことはないからね。みんなとは、みんなと最後に会った時の思い出がお別れの気持ちになっているから。」とあった。彼女のお人柄を感じる。本当に最後まで尊敬できる仲間だった。時々、私信として届くメールがうれしかったこと、仲間であり親子であるようなそんな関係、かけがえのない存在だったことを改めて思う。

今回の癌は最初の癌の時の輸血が原因の肝臓癌だったという。悔しいが、人間はいつか必ず死ぬ。自分の親も、自分だっていつかはこの世からいなくなる。最近、どのような最期を迎えるかがとても大事に思える。まさに、どう生きるかということだと思ふからである。彼女の死を通して、その思いがさらに強くなった。

先日彼女を慕う仲間と彼女の埋葬されている共同墓地に行ってみた。周りに桜の木が植えられ、海も見える墓地には、ご主人共々名前が彫られていて、生年月日が書いてあった。すでに亡くなった方は亡くなった年月日がさらに彫られている。残された家族が困らないように最後まで考えた身の処し方で見事だと思った。

2月下旬、ご主人から手書きの葉書が届いた。1枚1枚奥さんの関係者に書いているものようだった。きっと葉書を書くことで、寂しさを紛らわせていらっしやるのではないかと思う。かけがえのない最高のパートナーを亡くした悲しみは計り知れない。

間もなく桜の美しい季節になる。4月には彼女を偲ぶ会を予定している。桜の咲く中、仲間たちとお墓参りをして、その後場所を移して皆でそれぞれ彼女との思い出話を披露したり聞いたりすることで、彼女を偲ぶことができればいいと思う。(T・H)

台湾で聞いたこと

テレビで台湾特集を見た夫が、それまで関心がなかった台湾へ行こうという。今回のツアーは、愛媛県唯一の国際線の上海便の存続をかけて、県の助成金も少し有り、車の駐車料金の値引きもありで、ツアー料金の割には、グレードの高いホテルや観光内容だという触れ込みだった。

昼過ぎの便で、まず、松山空港から上海まで飛んで、それから台湾の桃園空港まで飛んだ。上海では、空港内を走るように歩き、航空券が手元のないままゲート前に行かされた。年配の参加者も多くいて、乗り換えの時間差が微妙で、上海経由台湾行きは、ツアー参加者には不評だった。

だが、空港で、私たちを待っていてくれた台湾人ガイドの話はどれも興味深いものだった。年配の参加者は彼の話に関心を寄せていた。

最初の日、桃園空港から、バス移動で台湾新幹線に乗り台南まで移動した。この新幹線だが、彼の話によると、エンジンはドイツ、システムはフランス、作ったのは、日本だそうだ。台湾の国内事情がよくわかる話だと思った。彼が話した新幹線利用の注意事項のひとつに、チケットの入れ方取り方というのがあった、ゆっくり入れて、ゆっくり待って、それから取ってという。日本式に慣れている日本人がチケットを入れたり取ったりすると機械の調子が悪くなるらしい。実際に、ツアー仲間が改札を利用すると、次々にエラーが出て職員の手作業サービスが始まった。速さに慣れている日本人には、この改札口利用には、慣れがいるというのは本当だった。

二日目、台南から台中までのバス移動の際に、八田與一という人の話を聞いた。車外の景色は、緑が濃い植物や水の豊富さが目に入り、この土地の豊かさが感じられた。

八田與一は、1886年、金沢市生まれ。1910年、東京大学土木工学学科を卒業後、台湾総督府内務局土木科の技手として、台北に赴任した。当時の日本政府は、アジアの国々を次々に、植民地化しようとしていた。中継地の台湾の食糧事情改善が国策となり、台南のダム建設と水路建設のために八田與一は台北から台南に行くことになり、彼は、その事業の総責任者になった。その当時の台南は、干ばつと水害の繰り返りで、食物が収穫できず、毎日の水汲み作業が欠かせない場所だったそうだ。干し上がった土地に伝染病が蔓延することもあり、農民の暮らしは困窮していたという。赴任当初は、水路建設

やダム建設に農民の反対も多く、農民達には、彼の話は、絵空事のような話に聞こえたようだ。しかし、彼は、「バッテンライ（八田来）」と言われ、毛嫌いされながらも根気強く説得に努め、計画を実行させた。総距離 1600 キロの編みの目のような水路は、現在も使われていて、バスの車中から見た景色は、台湾の農業生産の豊さを実感させた。今は、台湾最大の穀倉地帯になっているというから、日本の台湾統治時代の素晴らしい遺産と言える。1930 年、烏山頭ダムと嘉南水路が完成後、二期作、三期作も可能となり、白米、サトウキビ、野菜などができるようになるのを見届けて、彼は台北に移り住んだ。

八田與一の技術力で作られたダムは、現在でもアジアで第 3 位だというのが、何より彼の素晴らしいその人間性。彼の台湾人に対する姿勢だったそう。日本人の立場が上だという態度をとる日本人が多い中で、八田の台湾人に対する気遣いや接し方は、人として尊敬するに値すると評価されている。台湾の教科書に彼の偉業は載っているというから、日本人としては、誇らしかった。

しかし、残念なことに、台湾での成功をフィリピンでも成功せよという日本陸軍の徴用で、彼は、1942 年、フィリピンに赴任するところになった。が、フィリピンに上陸することはなかった。アメリカの潜水艦に撃沈されて、八田は命を落とすことになる。その知らせを受けた八田の妻は、彼が作った烏山頭ダムの放水口に身を投げて後を追ったそう。その後、戦後、昭和 21 年に、嘉南の人々によって、ダムの近くに二人の墓が建てられ、現在でも、5 月 8 日は、八田の功績を讃える日であり、日本にいる八田の子孫が招かれて、お祭りが開催されているそう。現在、元のダム建設の町だった場所に、八田記念館も作られ当時の建物も再現されているという。

以前、台湾制作の映画「KANO」を見たことがあった。松山商業出身の近藤平太郎監督が率いる「嘉義農林野球部」の話の中に、八田與一が出ていた。台湾から甲子園に出場した野球部の話だったが、あの高校生らが住んでいた地域がこの烏山頭ダムの場所だと知った。

ガイドによると、台湾のお土産で有名なものは、パイナップルケーキだそう。台湾で普通に売られているものは、賞味期限は 90 日、賞味期限が短くなるほど値段が高くなり美味くなる。このパイナップルケーキだが、三年前に、コンビニで販売されていたものが摘発された。台湾には、食料品を抜き打ち検査する機関があり、このコンビニの商品は摘発され、販売中止になった。賞味期限 270 日、値段も ¥100。日本の最大手のコンビニの商品だった。そして、二年前、台湾国内の 100 円ショップの商品が、福島からきた汚染物資だということが発覚。汚染物資数万点の商品になり、台湾国内の 100 円

ショップで販売されていたというから恐ろしい。台湾の外務省職員は、日本の外務省からの圧力で汚染物資を購入するしかなかったと記者会見で話し、外務省職員バッジをその場で外して辞任したという。100円ショップも日本最大手。ガイドは、「台湾人は、今、日本製のものには食べないんですよ」と言った。そして、今また、摘発されたあのコンビニのバイナッブルケーキが販売中だという。賞味期限は300日、¥75。

今回の旅で、私が一番行きたかったのは故宮博物館。時間が限られてはいたが、あの「白菜」を見た。思っていたより小さかったが、白菜の中にいる二匹の虫も確認できた。「角煮」は、新しく完成した台南の博物館に行っているそうで見えなかった。ガイドの説明によると、蒋介石が中国から運んできたものは、どれも小さく人間が簡単に運べるものだけだったそうだ。中国から持ち出したものは、100万点。だが、実際に、運んできたものを整理した時には、70万点になっていたそうだ。小さかったのも、いろいろな立場の人が自分の懐に入れてしまったらしい。実際に、当時の物が、意外な場所から発見されて出てきているという。実際、展示しているものは、精巧で素晴らしいが、小さい。その中で、大きかったのは8枚の衝立。蒋介石のライバルと言われた汪兆銘がかつて日本との関係を密にするために日本へ送ったとされたものだ。国連の常任理事国を争った中国と中華民国の選挙が行われたとき、日本は中国に投票した。そのお詫びに、日本は、皇居の中にあつたこの衝立を台湾へ返還したという。小さい展示品が多い中で、この衝立は大きく素晴らしい。

蒋介石の妻だった女性が、1991年、台湾からアメリカに移住する前夜、故宮に大型のダンブカーが横付けされた記録が残っているという。その時に、持ち出されたものは、展示されているものより遥かに価値の高いもので、現在、アメリカのどこかに存在しているという。故宮博物館の責任者も政権交代の時に退任した。その時に、故宮博物館目録の数があつていないことが発覚し蒋介石の妻の財宝持ち出しの話が出てきたそうだ。事実かどうか……。

蒋介石が故宮博物館（紫禁城）から台湾へ持ち出したものは、300万点のうちの100万点。現在中国国内にその200万点が存在しないのは、文化大革命の影響だと聞いた。

台湾最終日、宿泊するホテルで、蔡英文総統を見た。私たちの観光バスがホテルに着くと、黒い車がずらり。体格のいい男性や顔つきの引き締まった女性たちがいる。ガイドは直ぐに台湾の政府のそれも上の人が来ていると気がつき、見たい人はこのままロ

ビーで待機してくださいと言ってくれた。疲れた人は部屋に入ったが、私は、政府の誰かというその人に興味がありロビーで待った。私たちの待機場所も制限されたが、宿泊場所が、円山大飯店だということもあっての幸運だった。SP に守られながら食事会を終えた彼女が出てきた。清潔感を感じる。手を振ると、少し頭を傾け笑顔を見せた。私たちが日本人かどうかはわからないと思うが、かつて彼女は、三年間、日本語を勉強したことがあるそうだ。

台湾には、本省人と外省人という言葉がある。中国から移り住んできた人と元々の台湾人。台湾議会が紛糾するのもこの関係故。政権が変われば、いろいろな実権を持つ人も変わってくると聞いた。国内情勢の変化に敏感な今回のガイドは、20年近く続けていた仕事を辞めて、得意な日本語を活かしてガイドになった。初の女性総統に期待を寄せる人と次のチャンスを待つ人に分かれている。ガイドは後者のような気がする。

(M.T)

雑感

今年も2月末から3月にかけて“綾雛山まつり”が開催され、明るい春の陽射しの中、三々五々スタンプラリーのついたパンフレットを片手にした町内外からのお客様で賑わいました。笑顔が行き交う日々でした。

今年には新たに80年位前に建てられたという嘗て医院だった古民家での雛山が加わりました。雛山開催中は大変な混雑で、入ることが出来ませんでした。終了後も1週間延長されることになり、思いがけず、ゆっくり拝見できました。丁度、案内の方が知人だったので、それぞれのお部屋に飾られた一つ一つのお雛様やお人形、さげもん(吊るし飾り)、着物、調度品などの由来を詳しく説明して頂きました。

たまたま来ていらした94歳になるおばあちゃまからは、当時の医院での様子や雛山に込めた想いを伺うことも出来ました。

朝晩はいつまでも真冬の様な寒さの日が多いのですが、木々は冬芽を膨らませ芽吹きの時を迎えようとしています。

私がほぼ毎日出かける、近くの川原のアカメヤナギは昨年のとんでもない大雨の際の増水で根元から倒れてしまいましたが、芽吹き始めています。強い生命力に吃驚です。ガンバレ！ガンバレ！橋から見下ろしながら毎日声をかけています。枝先の小さな黄緑の柔らかい幼葉が日々広がっています。

沢山のメジロやエナガも集まってきています。まるで応援団のようです。

朝夕、我が家はシャワーのように降り注ぐカララヒワの囀りに包まれています。黄色い身体に巻き舌の美しい囀り。カナリアのご先祖様と知り納得です。

例年なら、1月中にウグイスの歌の練習が始まりますが、今年は何時まで待っても聞こえません。高台の地区ではとっくに歌っていると聞き、待ちわびる日々が続きました。

3月11日、初めて川向こうの森の方向からかすかに一声聞こえてきました。

いつまでも続く大きな余震と、まるで先が見えない東京電力福島第一原発の事故処理の中で、まだまだ不自由を強いられている方々が多い東日本の方達へのエールのように聞こえました。

炉心溶融した原発で融け落ちたままになっている核燃料を取り出す方法はおるか、どこに有るかさえ調べられない状況が未だに続いています。

汚染地域を除染した際に出た廃棄物の処理方法も決まっているとは言えない状況です。

そんな中で次々に原発の再稼働が始まっています。

原子力規制委員会は原子力推進委員会ではないのか、と疑いたくなってしまいます。安全、そして万が一事故が起こった際の避難方法を審査するのは当然ですが、通常の稼働で増え続ける使用済み高レベル核廃棄物の処分方法が確立されていないにも拘らず、再稼働を認可するのはとんでもないことだと思えて仕方がないのです。

3月17日原発避難者集団訴訟で前橋地裁は国や東電は津波による影響を予見できたにも拘わらず東電は対策を講じなかったし、国は適切な指導をしなかったとして、賠償を命じました。

全国で約30件の集団訴訟で初めての判決です。

官房長官は「精査し対処する」としていますが、控訴しないで欲しいと思います。

国は辛い思いをしている人に寄り添う存在であって欲しいのです。

しかし、官房長官は「今後もエネルギー政策には変更は無い」とも言っています。

あれだけの事故を起こしながら、そして、核廃棄物が処理できないのに、2030年の電源構成において原発の占める割合を2割程度にしようとしています。信じられませんか。理解できません。

この判決が、今後“原発ゼロ”を後押ししてくれることを切望します。

ウグイスの歌は、日々美しく響き渡るようになりました。

昨年夏以降、老化が進む我が家の大型犬の大五郎は2月14日、無事14歳の誕生日を迎えました。11日、杏は一足先に6歳になりました。

動きは不自由ですが、今でも杏の保護者だと思っているようで、杏の様子が気になって、姿が見えないと心配そうに探します。杏が見えると、安心した様子で伏せをして杏の様子を目で追っています。動き過ぎて、後ろ脚に力が入らなくなって座り込んでしまうことも度々ですが、リハビリになっているのは確かです。

お天気の良い日、庭の陽だまりで気持ちよさそうにウトウトとまどろんでいる姿は本当に幸せそうです。

私が家に居る時は、暫くの間は自由に庭に出ることも出来る様になりました。家に入りたくなると、ステップの前で自動ドアを開けたり閉めたりして知らせてくれます。自力ではステップを上がるのは無理だからです。

夏になる前に、縁の下に入り込めないように周りに柵をしなくては、と思っています。

暑くなると、日陰を求めて縁の下の奥深くに潜り込むと迎えに行けません。

足の甲で歩くようになった大五郎ですが、最近では膝で歩く姿も目に付くようになりました。

身体中、不調だらけに違いありませんが大五郎は決して苛立ちの表情を見せません。自分の老いを有りのままに受け入れ、気付いて手を貸すと嬉しそうな表情を浮かべます。ブラッシングやマッサージをすると私の膝に頭をもたげて寝息を立てて眠ってしまいます。

大五郎を見ていると、私もこんな風に老いを迎えたいものだと思いますが自信は有りません。あれこれ不満ばかり並べ立てるイヤミバアサンになることは間違いありません。

大五郎は本当に穏やかなオジイチャン犬です。

ほぼ毎日、自宅から徒歩数分の橋に出かける日々が続いています。

午前10時頃、川の東側の崖から、キャラキャラッという声と共に、水色の細いラグビーボールのようなものが川に急降下、あっという間に崖の近くの裸木の枝にとまります。ヤマセミです。

何度も何度も繰り返されます。

枝では、番いでしょうか、雄と雌の2羽が揃った姿も度々見られます。

ある時、崖の穴の前で静止飛行していました。穴に顔を突っ込んだようにも見えました。もしかしたら、子育て中かと期待しましたが、それ以降、崖に近づく様子を見ることは有りませんから、巣作りに向いているかどうか下見していただけたのかもかもしれません。

ヤマセミを待っている間、私をもてなしてくれるのは、キセキレイ・イソシギ・コチドリ・カルガモ・ヒドリガモ・マガモ・コガモ・カワウ・オオバン・猛禽類・・・。

キセキレイやイソシギは水辺でチョコチョコ歩きながら餌を啄んでいる姿からは想像できない速さで水面を滑るように飛んできます。

カルガモは何時も笑っています。

カワウは石の上で精一杯翼を広げて乾かしている姿をよく見かけます。

コチドリは黒いヘアバンドに黒縁のゴーグルを付けている様な、何とも個性的な御面相です。

常緑樹の葉陰ではトビが2羽まったりとしています。

大きいのに、いつもカラスに追い立てられているトビ、小さいけれどカラスを目の敵にしているチョウゲンボウ、悠然と川を上空から見張っているようなミサゴ……。

日毎に変わる川面の彩り。川の流れの音。様々な鳥の声。夢の様な時間はあっという間に過ぎ、昼食の準備の為、帰宅です。

午後2時過ぎ、私は再びイソイソと橋に出かけます。橋のすぐ下にあるコンクリートの塊にカワセミがやって来る時間です。

暫く、倒れたアカメヤナギにやって来るメジロやエナガの姿や上空を舞う猛禽類を眺めていると、ツイーッという声。カワセミのお出ましです。中洲の叢に隠れてしまうこともあります。たいていは石かコンクリートの塊にとまってくれます。最初出逢った時はあまりにも近くだったので鼓動が指先まで伝わってしまっていてシャッターをきる事が出来ませんでした。

2羽で堰にとまっておしゃべりをしている所にも居合わせる事が出来ました。

雄と雌です。

番いになれたかどうか、確かめる術は有りませんが期待しています。

カワセミがとまっている石の周りには橋の上からでも見えるくらい沢山の小魚が水面をキラキラ波打たせながら群れ泳いでいます。魚をプレゼントしたでしょうか。

少し出掛けるのが遅くなりカワセミには逢えないと諦めながらも暫く待っていた時のことです。

カワセミポイントからは少し離れた所(以前、毎日のようにゴイサギやホシゴイがウトウトしていたところ)に、何やら赤褐色のものがノソノソ動いています。大きなカエルかサンショウウオかと思いながらカメラを向け、拡大してみました。

見たことの無い鳥です。眼の周りから胸にかけて赤く、脚も赤、お腹から尾にかけて白黒のまだら模様です。歩きながら水に顔を突っ込んで餌をとっている様です。帰宅後調べるとヒクイナでした。沖縄のヤンバルクイナの仲間だそうです。ハジメマシテ！の出来事でした。

花もチョウも日毎に種類が増えています。

昨年3月、土手の斜面で咲いているのを見つけたアマナに今年も逢えます様に。

1月にはムラサキツバメとヤクシマルリシジミに出逢うことが出来ました。

もうすぐ4月。今年こそはツマキチョウに出逢いたいと願っています。(K.O.)

地域住民と東温市長らが直接対話した夕ウソミーティング



地域の課題 市長に直接

東温で住民対話

地域住民と加藤東温市長ら市幹部が直接対話する初の夕ウソミーティングが23日夜

「日線は市民に」市長が所信表明

△東温市▽(28日・定例)会期を3月15日までの16日間と決め、144億200万円の2017年度一般会計当初予算など議案を上程した。加藤東温市長が所信表明で、市民の声を大切に

同市北方の北方西部公民館で始まり、市民約50人が多様な生活課題について意見を述べた。一人一人の声を市政に生かすとした市長公約に基づき開催した。加藤市長は、公約に掲げた介護・医療費負担の軽減につなげる健康施策や、災害対策を説明し「直接意見を聞くことで生きた勉強ができる場、地域課題を持

住民らは周辺の道路整備やごみの不法投棄などの解決を要望。防火行政無縁のデジタル化に伴う負担が大きいため高齢化の中で、交通弱者や耕作放棄地への対応をどう考えるか」といった声も上がり、担当課や市長が現状や今後の展望について一つ一つ回答した。今後は関係希望の地区を募集し、2年間で全市地区を回る予定。(伊藤絵美)

にするまちづくりの推進や災害に強い安全安心のまちづくりなご公約の柱としてきた四つの政策を説明。17年度重点的に取り組む施策を語り、「日線は常に市民に合わせ、職員一丸となって各種施策を推進し、あつたか笑顔の東温市の実現に向け全力で市政運営に取り組み」と述べた。

定例会で、空席となった副市長に元市総務部長の大石秀輝氏(63)を選任する人事案に同意した。任期は1日から4年間。大石 秀輝氏(おおい しひでき) 76年旧川内町移住入り、警察隊長などを歴任。合併後の東温市では市民福祉部長や産業建設部長などを務め、14年退職。副市長に大石氏 東温市議会は28日の



【紙面掲載】狩野孝明

愛媛新聞より

介護予防サービス 複数の事業所 4月実施予定

△東温市▽(7日・定例)東村温博、安井浩一、山内敏延、山内孝一(以上無所属)近藤千枝美(公明)の5氏が一般質問した。山内敏延氏は、4月から市町村が実施する総合事業へ移行する介護予防サービスの見直しをたずねた。理事者は事業所への説明会や参入意向調査の結果、実施を予定しているとし、「利用者は有効期間内は現在のサービスを受けられる。移行後も現行相当のサービスを利用できるので支障はないだろう」と説明した。山内孝一氏はスマーティンターチェンジの設置計画について進捗(しんちよく)状況を質問。加藤市長は「2016年度中に候補地を絞り込む。17年度以降は設置する地区協議会で協議し、地域の実情や意向を踏まえ最終決定したい」と述べた。安井氏は近年減少傾向にある国道11号桜三里の校の保存・整備を求め、加藤市長は「明花時期には現地確認し、国土交通省や西条市と協議の上、保存に向けた検討を進めた」と考えを示した。

山内孝一氏はスマーティンターチェンジの設置計画について進捗(しんちよく)状態を質問。加藤市長は「2016年度中に候補地を絞り込む。17年度以降は設置する地区協議会で協議し、地域の実情や意向を踏まえ最終決定したい」と述べた。安井氏は近年減少傾向にある国道11号桜三里の校の保存・整備を求め、加藤市長は「明花時期には現地確認し、国土交通省や西条市と協議の上、保存に向けた検討を進めた」と考えを示した。

新規の狩猟免許取得費用補助へ鳥獣害対策で理事者

鳥獣害対策で理事者
 鳥獣害対策で理事者
 鳥獣害対策で理事者
 鳥獣害対策で理事者

新規の狩猟免許取得費用補助へ鳥獣害対策で理事者。理事者は、2017年度から新規の狩猟免許取得者に取得費用を補助する方針を示し、「現状の捕獲実績では市単独の加工施設開設は難しい。近隣市町の取り組みを見守りたい」とした。また17年度に始まる小規模小

学校への校区外就学について、送迎支援の必要性を指摘。理事者は「現在の希望者は2人。想定より少ない結果と

相原氏は南郷年金基金運用制度の現状をただし、奨学金返済支援を始めた県内自治体の取り組みなどを提案。理事者は、現在寄付金で成り立っている基金の充実に向け、「よりなる周知を図り厚着増強に努める」とし、「若者の移住定住促進にもつながるとして支援を始めた市もある。関係部署で連携し検討した」と述べた。

人口減地区 誘客に知恵

人口減少が目立つ東温市の中山間部4地区で、移住交流拠点建設の整備などが進んでいる。市内でも認知度が低い地域に人の流れを

東温

生み出せよう住民らは2018年度から、各地の魅力を生かした体験プログラムなどを企画。まずは一度、地区へ足を運んでもらおうと知恵を絞る。

食材生かした中山間部 カフェ型交流拠点計画



プレオープンした「人定田」では地域おこし協力隊員(右)らが参加者を出迎えた

人手・資金確保が鍵

2月上旬、細田で知「プラン」した。自慢の細田米に愛着町の魚介をコラボさせた料理を自主ラベで料理を自主に、里山体験と呼びかけ。市内外の約40人が参加。市民が立ち上げ、市内外の約40人が参加。市民が立ち上げ、市内外の約40人が参加。市民が立ち上げ、市内外の約40人が参加。

中山間部には過疎化が深刻だ。市は国の地方創生交付金を基に、4地区の住民が立ち上げ、市内外の約40人が参加。市民が立ち上げ、市内外の約40人が参加。市民が立ち上げ、市内外の約40人が参加。市民が立ち上げ、市内外の約40人が参加。

市企画財政課は「地域の生き残りには稼ぐ力、住民の主体性が不可欠」とし、各地に配した協力隊員を軸としたPR活動や施設運営など自立的な事業展開を期待。東郷川創生会館の幹部荒川副会長は「地域のために住民が本気で取り組む覚悟が問われる」と受け止め、清川清流クラブの井上和歌会長は、中山間部の「協力不足」を補うには「道のつなごり」が重要」と市内の協議の必要を訴えている。

東温市全体をみわたった観光客をとりこめるためカフェ型の交流拠点を立ち上げることで、人手不足の解消を図る。久万山や蓮花の観光客の確保が課題

東温市全体をみわたった観光客をとりこめるためカフェ型の交流拠点を立ち上げることで、人手不足の解消を図る。久万山や蓮花の観光客の確保が課題

東温市全体をみわたった観光客をとりこめるためカフェ型の交流拠点を立ち上げることで、人手不足の解消を図る。久万山や蓮花の観光客の確保が課題

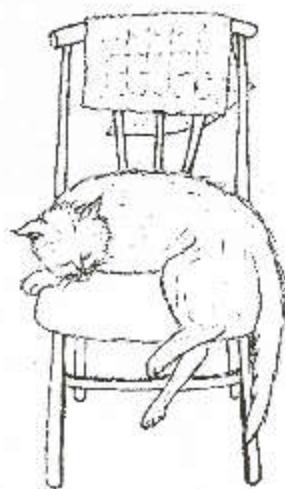
編集後記

冬の間、にぎやかに池で泳いでいたカモ達も北に帰ってしまいました。

周りはすっかり春になっていて、菜の花やミモザのあふれるほどの黄色が目につくようになりました。

相変わらずパソコンは苦手、文章も苦手、でも皆に助けられて何とか今回も編集を終えることができました。

猫のように寝てばかりではイカン、何か始めなきやイカン、考えることをサボってはイカンと号令はかけるのですが。(K・K)



くらしの学習会では、臨時会員を募集しています。
活動会員 2,000円/年 購読会員 1,000円/年
振込先口座番号(郵便局) くらしの学習会 01610-5-21026
問い合わせ先 TEL/FAX 089-964-6956
E-mail: kt-hayashi@nifty.com